

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : 川越市教育委員会

1. 事業実施の目的

<事業実施の目的>

本市では、川越市第3次教育振興基本計画においては、一人一人の子供の発達や学びを、切れ目のないようにつなげ、学びや成長を確実に受け止め、次の段階で一層発展できる教育・保育を目指すとする。そのために、幼稚園・保育園・認定こども園において、「川越市ときも学びのプロセス」を基盤とした「幼保小連携モデル指定研究」を行い、教育の内容、方法、及び連携の在り方について研究を進めていく。

また、研究の成果を周知し、教育課程編成・指導計画作成等の前提となる架け橋期のカリキュラムを作成し、共通理解を図り実践していくことで、市全体で学びの連続性をふまえた未来へつながる学力を育てていく。

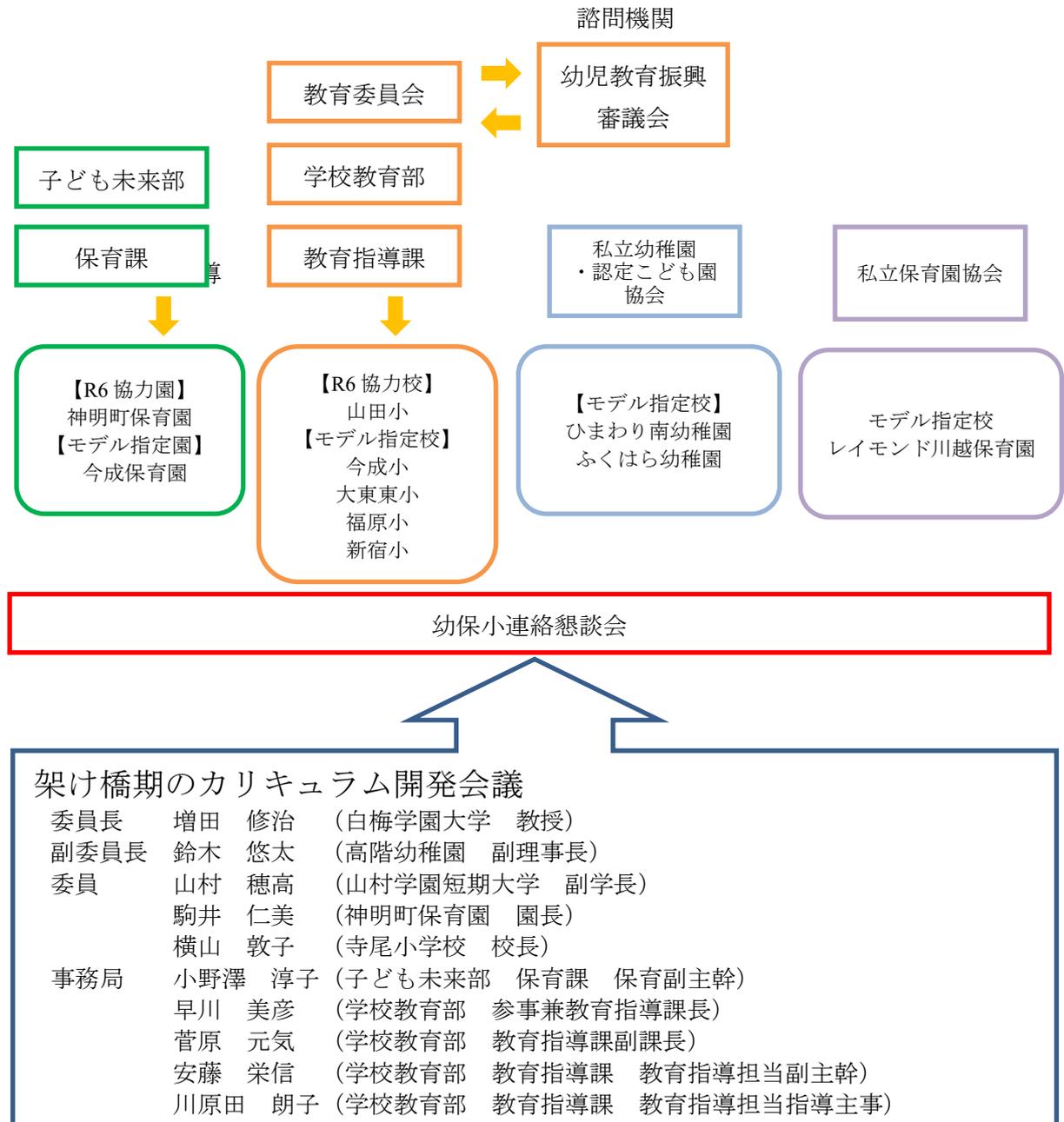
<園・小学校の施設数等>

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数			21	20	41	0	10		32	1
園児・ 児童数			3,309	1,545	3,012		1,054		16,908	480

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

<組織図・体制図>



(幼児教育振興審議会)

・ 大学教授、園・校の代表、保護者の代表といった有識者で構成。本市の幼児教育の推進及び幼保小の連携について協議する会議体。

(架け橋期のカリキュラム開発会議)

・ 大学教授、園・校の代表といった有識者で構成。架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

<体制づくりの進め方>

<進め方>

- ・教育員会教育指導課教育指導担当が事務局として、体制づくりを進めた。
- ・市長部局子ども未来部保育課と連携し、事業を推進した。
- ・私立幼稚園・認定こども園協会、私立保育園協会と連携し、事業を推進した。

<課題>

- ・本市は公立の保育園のみを設置しているため、私立幼稚園・認定こども園との連携が課題であった。

<対応策>

- ・幼児教育振興審議会において、本事業の趣旨及び事業計画を説明することで、私立幼稚園・認定こども園協会、私立保育園協会の代表者によって、各園へ事業を共有した。

2-2. 協力園・協力校

<協力園・協力校の概要>

国公立	設置類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
市立	保育園	神明町保育園	0歳児3人 1歳児10人 2歳児19人 3歳児20人 4歳児25人 5歳児21人	A
市立	小学校	山田小学校	689人	A
※令和5年度における指定園・指定校（令和6年度1月アンケート実施）				
私立	幼稚園	ひまわり南幼稚園	3歳児72人 4歳児84人 5歳児66人	B
私立	幼稚園	ふくはら幼稚園	3歳児6人 4歳児16人 5歳児10人	C
私立	保育園	レイモンド川越保育園	0歳児6人 1歳児16人 2歳児18人 3歳児18人 4歳児16人 5歳児18人	D
市立	保育園	今成保育園	0歳児3人 1歳児12人 2歳児18人 3歳児18人 4歳児18人 5歳児18人	E
市立	小学校	大東東小学校	537人	B
市立	小学校	福原小学校	688人	C
市立	小学校	新宿小学校	604人	D
市立	小学校	今成小学校	359人	E

<協力園・協力校の指定プロセス>

- ・ R4…市立保育園、私立幼稚園・保育園から、規模等を検討し希望・推薦等を受け指定。
- ・ R5…R4の指定園の主な接続先となる市立小学校と併せて指定。
- ・ R6…市立保育園、市立小学校を協力園・協力校として指定。

<自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組>

- ・ 担当指導主事を置き、園と校との調整を図った。

<課題>

- ・ 協力園の負担が大きいという課題。

<対応策>

- ・ 原案を事務局で提示するなど、研究の見通しを共有することで対応した。

<協力園と協力校同士の連携・協働の取組>

- ・ 令和5年度においては、連携会議に担当指導主事及び開発会議の委員会が参加することで、円滑な連携を行えるようにした。また、連携会議の運営マニュアルを作成提供した。
- ・ 令和6年度においては、令和5年度の研究を生かし、事務局が会議等に参加するとともに、園・校による主体的な連携が行えるよう日程等を柔軟に対応した。

2-3. 協力団体等

<協力団体等の概要>

	団体名等	団体等の活動概要
1	川越地区私立幼稚園・認定こども園協会	地域の幼児教育の振興と発展
2	川越地区私立保育園協会	市内の法人立保育園の発展と保育振興
3	川越市小学校長会	市内の小学校の振興と発展

<各協力団体等との連携>

- ・市長部局子ども未来部保育課と連携し、私立幼稚園・認定こども園協会、私立保育園協会、川越市小学校長会と連携し事業を推進した。

<課題>

- ・本市は公立の保育園のみを設置しているため、私立幼稚園・認定こども園との連携が課題であった。

<対応策>

- ・幼児教育振興審議会において、本事業の趣旨及び事業計画を説明することで、私立幼稚園・認定こども園協会、私立保育園協会の代表者によって、各園へ事業を共有し、連携を推進した。また、幼保小連絡懇談会の枠組みを活用し、園の管理職と事務局が直接、連絡調整を行うことで対応した。

2-4. 架け橋期のコーディネーター等

<架け橋期のコーディネーター等の概要>

新規／継続	事業に関わった 年度	役職名	経歴

<架け橋期のコーディネーター等の役割等>

- ・採用なし

3. 架け橋期のカリキュラム開発会議

3-1. 会議委員等

<会議委員一覧>

ふりがな 会議の代表者氏名		ますだ しゅうじ 増田 修治		他9名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間	
増田 修治	白梅学園大学 教授	幼保小連携モデルアドバイザー 開発会議委員長 架け橋期カリキュラム担当 スタートカリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
鈴木 悠太	私立高階幼稚園 副理事長	開発会議副委員長 アプローチカリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
山村 穂高	山村学園短期大学 副学長	開発会議委員 架け橋期カリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
駒井 仁美	川越市立 神明町保育園長	開発会議委員 アプローチカリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
横山 敦子	川越市立 寺尾小学校長	開発会議委員 スタートカリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
小野澤 淳子	こども未来部 保育課 保育副主幹	開発会議事務局 アプローチカリキュラム担当	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
早川 美彦	学校教育部 教育指導課 課長	開発会議事務局	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
菅原 元気	学校教育部 教育指導課副課長	開発会議事務局	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
安藤 栄信	学校教育部 教育指導課副主幹	開発会議事務局	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	
川原田 朗子	学校教育部 教育指導課指導主事	開発会議事務局	令和6年4月1日～ 令和7年3月31日	

<会議委員の決定プロセス>

- ・本市幼児教育の推進にこれまで携わっていただいた方を中心に選定・依頼し決定した。
- ・幼保小の有識者をバランスよく選定した。

3-2. 開催実績

<開催実績>

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月18日 15:00~16:30	(1) 川越市ときも学びのプロセス (2) 川越市幼保小連携モデル指定校等研究委員会年間計画 (3) 川越市幼保小連携モデル指定校等研究委員会3カ年計画 (4) 各園の研究進捗状況	研究計画及び研究の方向性の確認
12月14日 15:00~16:30	(1) 各園の研究進捗状況 (2) 来年度の研究計画について	園の進捗状況を確認し、次年度の方向性を確認

令和5年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月10日 13:30~14:00	(1) 小学校における効果検証内容について (2) 幼保小連携会議の進捗状況について (3) 今年度の研究計画について	・本年度の方向性及び計画 ・連携会議の具体的な進め方
10月13日 13:30~14:00	(1) 幼保小連携会議の進捗状況について ・架け橋期カリキュラムについて (2) 令和6・7年度の研究計画について ① 令和6・7年度の研究計画について ② 幼保小連携ステージ図について ③ 幼保小連携計画及び幼保小連携実施報告について ④ アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムについて	・各園、各校の取組状況報告 ・架け橋期カリキュラムの共通の視点等を協議
12月13日 15:00~16:30	(1) 第3回幼保小連携会議について (2) 幼保小連携について ① 川越市幼保小連携モデル指定研究について ② 架け橋期カリキュラム調査研究事業について (3) 令和5年度幼保小連携モデル指定研究成果発表会について (4) 今後の幼保小連携について (5) スタートカリキュラムについて	・各園、各校の取組状況報告 ・各園、各校の作成したカリキュラムについて ・今後の進め方について ・スタートカリキュラムについて
2月9日 13:30~14:00	(1) 令和6年度の研究について (2) アプローチカリキュラムについて (3) スタートカリキュラムについて	・令和6年度研究計画及び研究の方向性決定

令和6年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月28日 15:00~16:30	(1) 今年度の研究計画について (事務局より) (2) 各カリキュラムの開発についての情報共有(各担当より) ①川越市スタートカリキュラム ②川越市アプローチカリキュラム ③川越市架け橋期カリキュラム (3) グループ協議(各担当ごとに分かれて実施)	・今年度の研究計画について協議し確認 ・各カリキュラムの作成方針について協議し確認 ・各カリキュラムの作成内容について協議し、担当で原案を作成することを確認
10月16日 15:00~16:30	(1) グループ協議 ①川越市スタートカリキュラム検討 ②川越市アプローチカリキュラム検討 (2) 全体協議 ③川越市架け橋期カリキュラム検討	・各カリキュラムの原案作成に向けて、具体的内容について協議し、令和5年度までのモデルプランを参考に、より活用しやすい可視化の視点をもって作成を進めた
12月3日 15:00~16:30	①川越市スタートカリキュラム検討 ②川越市アプローチカリキュラム検討 (2) 全体協議 ③川越市架け橋期カリキュラム検討	・各カリキュラムの原案について、協議し、第3回の方向性で、詳細をつめることを確認し、各担当で完成させることを確認
2月9日 15:00~16:30	(1) グループ協議 ①川越市スタートカリキュラム ②川越市アプローチカリキュラム (2) 全体協議 ③スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの修正点の確認 ④川越市架け橋期カリキュラム (3) 全体協議 ⑤各カリキュラムの周知・活用方法について	・完成した各カリキュラムの修正点について協議し、一部修正することを確認 ・周知方法について、市内の成果発表会を実施することを確認 ・協力園・校の実践発表 ・各カリキュラム例の活用についての説明 ・指導助言(開発委員及び幼児教育振興審議会委員に依頼することを確認) ・各カリキュラムは、全小学校、全園へメールにて配付することを確認

3-3. 成果と課題

<架け橋期のカリキュラムに関する議論>

- ・カリキュラムの作成にあたっては、幼保小の連携は幼児教育への理解を出発点とすることを協議し、市内保育園・幼稚園等で令和4年度に研究した内容を共有すること。
- ・令和5年度に指定した園・小において、実際の交流を起点にモデルプランとなる架け橋期カリキュラムを作成し、実践すること。
- ・そのための連携会議マニュアル及び架け橋期カリキュラム作成のための共通の視点を作成すること。
- ・令和5年度の指定研究において委員が担当園・校を決め、連携会議に出席して指導助言にあたりカリキュラムを作成すること。
- ・令和4年度、5年度の研究の実際から、園・校の負担を軽減するため、市としての架け橋期カリキュラムの例を作成し、周知していくこと。
- ・架け橋期カリキュラムをより、具体的に園・校での実践に活用されるよう、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの例を作成し、周知していくこと。
- ・

<会議設置による成果と課題>

【成果】

- ・開発会議による計画を立て、指定研究を4年度、5年度、そして協力園・協力校による研究を実施することができた。
- ・市としての架け橋期カリキュラム例を研究開発することができ、市内全園・校に周知することができた。
- ・各カリキュラムの開発や、研究園・校への指導助言等を通して、幼保小の連携の在り方のモデル例を市内の園・校へ示すことができた。

【課題】

- ・指定園・校や協力園・校の取組を、今後市内に横展開していくための方法が課題である。
- ・委員の原案を、整理していくための事務局の負担が大きかったこと。

【対応策】

- ・成果発表会を実施し、共有を図るとともに、電子データを配付し共有する。
- ・今後、幼児教育振興審議会を中心に、事務局が連携し、市内の教職員研修会等で、活用の周知を図っていく。
- ・事務局員が、教育指導課のみであったため、可能な範囲で、教育員会内での担当のサポート体制を構築するとともに、市長部局のこども未来部保育課との連携を継続していく。

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

<開発プロセス>

- ・開発会議で協議した、フォーマットを事務局が整理し、園・校へ提供。
- ・開発は、各園・校が主体で開発。
- ・園校は小学校区を基本に、主な接続先となる組み合わせで開発。
- ・開発会議で作成した、連携会議マニュアルを活用し、連携会議を年3回以上実施し、カリキュラムを開発。
- ・連携会議は、①実態の把握、共有②共通の視点に基づき協議③園・校それぞれの担当部分の原案を作成④対面及びオンライン及びメール等で原案を共有協議⑤園・校の作成カリキュラムを合体させ協議し完成という流れで開発を進めた。

(課題と対応策)

- ・事務局主導では、連携会議の日程調整が課題となった。
- ・園、校が、主体的に会議が行えるよう事務局を調整役として、園・校の管理職間、担任間で調整を図った。

<共通の視点>

- ・開発会議作成の共通の視点では、本市が作成している「川越市ときも学びのプロセス」を活用し、設定した。カリキュラム作成にあたって、園・校が具体的に協議しやすいよう設定した。

(課題と対応策)

- ・モデルプランとなった令和5年度に作成した4つのカリキュラムの実施園・校から、カリキュラムを活用するために、より具体的なアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムが有効ではないかと開発会議で協議された。
- ・対応策として、これまでの研究を基に、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの市としての例を作成し、架け橋期カリキュラムを園・校が作成活用しやすくなるようにした。

<相互理解>

- ・連携会議を定期的に行うことが課題でもあったが、実際に職員が交流し話し合うことが最も重要であるということを知ることができた。また、本市の幼保小の研修会や連絡懇談会の機会を活用していくことも共有することができた。

4-2. 架け橋期のカリキュラムの概要

<指定園・校等によるカリキュラムについて>

- ・各園・各校の実態に応じて、柔軟に変更・作成できるようにした。
- ・園・校の学びの流れやつながりを一続きのカリキュラムとして可視化することで、学びの連続性が意識できるようにした。
- ・職員の交流、子供同士の交流など実際の連携も可視化できるようにした。

<架け橋期カリキュラム例について>

- ・今後、横展開を充実させるために、市立保育所と小学校のカリキュラムを基本として、幼稚園・認定こども園・私立保育所も参考にできるモデルとして作成した。
- ・「共通の視点」で話し合い・共有することで各園・各校の実態に応じたカリキュラムが作成できるようにした。
- ・園での経験が、小学校の学習につながっていること点を中心に、育ちと学びのつながりを可視化することで具体的な実践に生かすことができるようにした。
- ・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムと合わせて活用することができるように、3つのカリキュラムをセットで活用できるようにした。

<既存のカリキュラムとの相違>

- ・架け橋期のカリキュラムは、期待する子供像など、幼保小で、子供の姿を共有すること、共有するための職員の交流の場を設けることにより作成することができる。園や校で、取組が完結することはなく、実際の連携が生まれるような役割をもっていると考えている。また、作成することで、当該の園・校の学びの連続性を可視化し共有することができるだけでなく、職員、子供同士の交流を計画し、実現しやすいものとなっていると考える。

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

(実践)

- ・令和5年度においては、作成しながら職員間の交流ができたことが一番の実践である。また園においては、小学校を見通した保育や指導、小学校においては、園での経験を生かした指導を実践にて意識することができたと考える。
- ・令和6年度においては、令和5年度の指定園・校及び令和6年度の協力園・校において、職員間の交流だけでなく、子供同士の交流を多くの園・校で実現することができた。

(課題とPDCAサイクル)

- ・連携会議については、継続実施することが課題である。また、子供同士の交流を設定することが課題であったが、令和6年度には架け橋期のカリキュラム作成をきっかけに交流を実現することができた。
- ・今後、作成した架け橋期のカリキュラムについて継続的に、話し合い、改善を積み重ねていくことができるように、既存の研修会や連絡懇談会の機会を活用するとともに、園と小学校が主体的に交流の機会を設けることができるように、年間のスケジュール調整の中に幼保小の連携を位置付けていくことが必要であると考えます。

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
8月5日	子供のよりよい成長を考える研修会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・講演「幼保小子どもの育ちをつなぐ」 講師：千葉大学 特命教授 富田 久枝 氏 ・グループ協議
1月～2月 6会場にて	幼保小連絡懇談会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・授業参観 ・グループ協議
2月15日	川越市幼保小連携モデル指定研究成果発表会	対面 オンライン	指定園・校 ※市立保育園は悉皆	・成果発表 ・指導助言（開発会議）
令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
8月25日	子供のよりよい成長を考える研修会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・講演「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた接続の在り方について」 講師：教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官 齋藤博伸 氏 ・グループ協議
10月13日	令和4年度川越市幼保小連携モデル指定研究成果発表会及び令和6・7年度川越市幼保小連携モデル研究趣旨説明会	対面 オンライン	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・令和4年度における各園の取組報告 ・指導講評 山村学園短期大学 副学長 山村 穂高 氏 白梅学園大学 教授 増田 修治 氏
1月～2月 6会場にて	幼保小連絡懇談会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・授業参観 ・グループ協議
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
8月27日	子供のよりよい成長を考える研修会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・講義「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりとした架け橋カリキュラムの作成について」

				講師：白梅学園大学 名誉教授 無藤 隆 氏 ・グループ協議
2月 6会場にて	幼保小連絡懇談会	対面	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・授業参観 ・グループ協議
2月25日	令和6年度川越市幼保小の架け橋プログラム成果発表会	対面 オンライン	小学校（悉皆） 園（希望者） ※市立保育園は悉皆	・神明町保育園・山田小学校の実践発表 「スタートカリキュラム・アプローチカリキュラム・架け橋カリキュラムの取組を通して」 ・川越市架け橋カリキュラム・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム「市のカリキュラム例を各園・各校で活用することについて」 ・指導講評及び講演 幼保小の連携に向けて 講師：白梅学園大学 教授 増田 修治 氏

<研修の成果と課題>

・子供のよりよい成長を考える研修会においては、平均達成度は5点満点で4点を越えている。感想より、幼保小の連携の重要性への理解や、グループ協議等で職員間の交流が持てる点について多くの肯定の意見があった。また、無藤教授の講演については、幼保の職員から非常に参考になったとの声が多くあった。特に令和6年度は、本市が取り組んできた架け橋プログラムの意義等にも触れていただき、各園・各校が今後取り組んでいくための参考となった。

・連絡懇談会においては、授業を参観できる点や、実際の情報交換・協議ができる点について肯定の意見が多く上がっている。連絡懇談会は、小学校区を中心にグループ協議も行っており、その点も参加者の肯定的な意見に寄与していると考えられる。

・各年度の成果発表会は、本市で取り組んできた研究を市内で共有するための効果的な機会となっていた。特に今年度は、架け橋期カリキュラム等の例を示すことができ、今後の活用を図っていききたい。今年度の協力園・校の管理職から、「架け橋期カリキュラム」の活用に係る取組は、職員・子供たちにとって良いことしかないとの発表もあり、市内で横展開していくための大きなきっかけとなると感じた。

5-2. 教材等の作成

<作成した教材等の概要>

<川越市ときも学びのプロセス>

・研究委員会により、幼保小連携モデル指定校の研究の視点や具体的な手立てを考えるとともに、「川越市ときも学びのプロセス」の検討・作成を行った。「川越市ときも学びのプロセス」（以下「学びのプロセス」）とは、教育振興基本計画に基づき、一人一人の子供の発達や学びを、切れ目のないようにつなぎ、次の段階で一層発展できる教育・保育を目指すため策定するものである。この「学びのプロセス」を活用することで、子供の学びの連続性に共通認識をもち、幼保小で連携を図っていくことを期待して作成した。

・令和4年6月に各園・校に配布。以後、令和5年、令和6年に小改訂を行い、配付を継続した。

<川越市架け橋期カリキュラム>

・市立保育園と小学校のカリキュラムを基本として、幼稚園・認定こども園・私立保育園も参考にできるモデルとして作成。参考にしながら、それぞれの園・校に応じたカリキュラムが作成できる。

・「共通の視点」で話し合い・共有することで、各園・各校の実態に応じたカリキュラムが作成できる。

・育ちと学びのつながりを可視化することで具体的な実践に生かす。

・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムと合わせて活用する。

・令和7年3月に市内全園・全小学校へ電子データを配付。

<川越市アプローチカリキュラム>

・市立保育所を基本として、幼稚園・認定こども園・私立保育所も参考にできるモデルとして作成。

・5歳児の時期において、どのような育ちや学びがあるのかを、5領域を基に「保育の視点」と「具体的な活動」で整理。

・架け橋期のカリキュラムで2年間を見通した上で、年長児の担当及び園が、より具体的に幼児期の育ちや学びを共有することができる。

<川越市スタートカリキュラム>

・小学校に入学した子供たちがスムーズに小学校の生活や学びに適応できるように、市内の全校が参考にできるモデルとして作成。

・絵本の読み聞かせや身体を動かす時間、歌を楽しむ時間など15分ずつ時間を区切って学習するモジュール制で作成。

・第1週から第5週までの期間。

・小学校の生活に慣れ、「学校は楽しいところ」を実感できるような視点を重視している。

<教材等の成果と課題>

・学びのプロセスは、認知度も上がり、園では保護者への周知等にも活用いただいている。また市内の研修会・懇談会でも継続的に活用できている。

・各カリキュラムは、令和7年度以降、市内で活用できるように、研修会等での周知を図っていきたい。令和6年度の協力園・校での実践においては肯定的な意見をいただけた。

5-3. その他の支援

<その他の支援の概要>

- ・ 令和6年度西部地区幼・保・小連携推進協議会（埼玉県西部教育事務所主催）において、幼保小の研究について発表を行った。
令和6年10月8日（火） 13：30～16：20（オンライン）
- ・ 令和6年度第2回不登校児童生徒の多様な教育機会の充実に向けた埼玉縣市町村協議会（埼玉県教育委員会主催）において、幼保小の研究について発表を行った。
令和6年12月25日（水） 10：00～12：00（オンライン）

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

- ・ 令和5年度の指定園・指定校による実践を通して
 - ① 4園・4小において、架け橋期カリキュラムを活用した指導を実施することができた。
 - ② 令和6年度末に実施したアンケートの回答から、令和6年度には子供同士の交流を実現した園・小学校があり、幼保小の連携の実践を継続させることができた。
 - ・ 令和6年度の協力園・協力校による研究の推進（神明町保育園・山田小学校）
 - ① 連携会議を実施し、「子ども像」等を共有し、架け橋期カリキュラムを作成して実践することができた。管理職を中心に幼保小の連携について、話し合い保育や教育の内容を共有することで、幼保小の連携を充実させることができた。
 - ② 山田小で、スタートカリキュラムを作成・実践することができた。入学後第1週から第5週の1時間目を15分のモジュール制で幼児期の経験を生かした活動内容で実施した。新入生がスムーズに小学校に適應することができ、登校しぶりが減少するなどの成果があった。
 - ③ 神明町保育園で、アプローチカリキュラムを作成し、実践することができた。これまでの取組を、小学校との接続を意識して、改めて5領域の視点で整理することができた。
 - ④ 子供同士の交流を2月に実施することができた。年長児が小学校を訪問し、校内の見学・授業参観をすることができ、入学への不安の解消や、期待感の高まりなどの成果があった。
 - ⑤ 市内成果発表会で、園と小学校で協力して実践を発表することができた。
 - ・ 架け橋期カリキュラム開発会議における研究開発
 - ① これまでの研究を基に、市内の園・小学校が架け橋期カリキュラムを作成するためのフォーマットとなる「川越市架け橋期カリキュラム」「川越市スタートカリキュラム」「川越市アプローチカリキュラム」を開発することができた。幼児期の経験を生かす視点、小学校への接続を見通す視点、教科の学びへの接続の視点を意識して作成した。
 - ② 各カリキュラムを、各園・各校が編集可能な電子データとして配付することができた。
 - ・ 連携体制の確立
 - ① 幼児教育振興審議会にて審議し、「子供のよりよい成長を考える研修会」と「幼保小連絡懇談会」を2つの柱として、職員の交流を中心とした連携体制を継続していくことができた。また、各園、各校が実態に応じて連携を主体的に進めていく方針を確認することができた。
 - ② 「川越市ときも学びのプロセス」「川越市架け橋期カリキュラム」を活用して、幼保小の連携に係る市全体の取組（研修会等）を実施することができた。
- #### <今後の課題>
- ① 指定園・校、協力園・校の実践の成果を基に、幼保小の連携の重要性を研修会等で周知していくことで、幼保小の連携を推進すること。
 - ② 「川越市架け橋期カリキュラム」「川越市スタートカリキュラム」「川越市アプローチカリキュラム」の活用方法について周知するとともに、具体的な実践を支援し共有していくこと。
 - ③ 持続可能な幼保小の連携を推進するために、既存の幼保小の職員の交流の機会を中心とした取組を充実させるとともに、新たな交流を機会の設定を検討していくこと。

<定量的・定性的な調査結果>

- ・ 実施せず

6-2. 園・校における成果

<先生方の指導と子供の姿の変容>

【先生方】

<教職員の交流による意識の変化への効果>

- ・ 幼保小の連携においては「教職員の交流が大切である」と改めて意識するようになった。
- ・ 幼保小それぞれの、子供の育ちや学びには、どのような経験があるのかを共有することができた、「連携してよかった」という実感の声が多くあがった。

<子どもの経験を生かした指導への効果>

- ・ 子どもたちの園での経験を意識し読み聞かせ、歌、運動、遊びの要素をスタートカリキュラムに生かして指導することができた。
- ・ その後の教科等の指導においても「園でやったことある?」「〇〇したことある?」経験をさらに共有するために声掛けが変わった。
- ・ 幼保小の連携が、改めて子供たち一人一人の育ちと学びをていねいに見取り、柔軟にカリキュラムや指導を工夫していくように意識等を変えることができた。
- ・ 子供たち一人一人を見取る意識や指導は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現するための土台となることを感じる事ができた。

【子供】

<小学校入学への安心感と期待感につながる>

- ・ 「職員間の交流」や「子ども同士の交流」が、小学校入学への意識の変化につながる。
- ・ 入学先に限らず、小学校という場を知る機会が小学校を「身近に感じる」という安心感や期待感につながった。
- ・ 自分の気持ちを伝えることだけでなく、自分の話を友だちが聞いてくれる嬉しさや、友だちの話を聞く大切さを実感した。

<経験を生かした学校生活のスタートにつながる>

- ・ 「スタートカリキュラム」で、園での育ちや学びの経験が、小学校でも生きることが実感できる授業での学校生活のスタートにつながる。
- ・ 園での読み聞かせや運動や遊びなどの活動の延長線上に小学校の授業があることが実感でき、学習への安心感につながるとともに、学習への意欲や自信につながった。

<安心した環境の中で人間関係を築き学ぶ>

- ・ 架け橋期のカリキュラムで2年間の学びを見通した職員が行う「スタートカリキュラム」で、学校生活のスタートにつまずかないことで、安心した環境の中で人間関係を築き、学びを広げていくことができた。
- ・ 園での経験を、生活科を中心に様々な教科の学習に生かすようになった。
- ・ 「学校は楽しい」という感想をもつ児童が多く、意欲・主体性・自信をもつことにつながり、実施校の多くで不登校や登校しぶりが大幅に減少した。5校中、3校は1年間ゼロ、2校は2名以内という効果があった。

<保護者の反応>

- ・ 直接の資料はなし（調査等は実施せず）
- ・ 学校評価等についての管理職へのヒアリングから、保護者会等で周知を行った園・校では、好意的な意見が多く上がったとのこと。園では、入学への不安の解消につながった意見や、小学校の様子を知るきっかけや、小学校の交流を行った園児の家庭での会話から、保護者の関心が高まったことなどが伺えた。小学校においては、特に入学時の1ヶ月の不安感の解消などに好意的な意見が多くあった。また、幼保小の接続を意識した教師の指導や教科での学習から、小学校教育の変化や柔軟性について、好意的な意見をいただくことができたと伺えた。

7. 今後の課題と展望

<今後の課題>

- ・川越市架け橋期カリキュラムを活用し、架け橋期の連携の重要性を周知すること。
- ・各園や各校の実態に応じた連携を推進し、架け橋期のカリキュラムを活用した実践のP D C Aサイクルを確立していくこと。

<課題の解決に向けて>

- ・教職員の意識の高まりを具体的な取組とするために、各校・各園での連携のベースとなる架け橋期のカリキュラムを中心にスタート・アプローチカリキュラムを併せて提示することで、園・校の実態に応じたカリキュラムの活用を推進する。（毎年、電子データと実践例等を送付し共有を進める）
- ・活用するための研修の機会を継続的に設けることで、架け橋期の取り組みを市内の全園・全小学校に横展開していく。
（子供のよりよい成長を考える研修会・幼保小連絡懇談会を活用するとともに、幼児教育振興審議会でさらなる機会の設定について協議を進める）
- ・実際の教職員の交流を大切にするとともに、取組を強制するのではなく、園・校が主体的に取り組むことができるようにし、取組を持続可能なものにしていく。
（令和6年度の幼児教育振興審議会で方向性について承認済み）

8. まとめ

本市では、架け橋プログラムによる3年間の研究を生かし、これまでの幼保小連携の取組の積み重ねを土台として推進してまいりました。3年間の研究を通して、研修会、交流会等での教職員の様子に変化が見られております。それは、幼保小の連携が子供たちの成長にとって非常に重要であるという意識が幼保小の教職員において高まっていることを研修会等の感想から感じています。

教職員の意識の高まりを具体的な取組とするために、各校・各園での連携のベースとなる架け橋期のカリキュラムを中心にスタート・アプローチカリキュラムを提示するとともに、活用するための研修の機会を継続的に設けることで、架け橋期の取り組みを市内の全園・全小学校に横展開していきたいと考えております。

国や県においては、公立小学校と私立の園との接続の枠組み等について、整理していただくとともに、今後も、多くの事例等の情報発信や研修機会の充実をお願いしたいと考えます。

本市での役割として、幼保小の教職員の交流の機会である、「幼保小連絡懇談会」は、義務教育である小学校と公立の保育所だけでなく、私立の幼稚園・認定こども園、私立の保育所など関係団体の協力の下、子供たちのための連携に取り組んできています。実際の教職員の交流を大切にして連携に取り組んでいくことが、取組を持続可能なものにしていく最も重要なことと考えております。

教職員の交流という第一歩を、各園・各校が踏み出すことができるよう、架け橋期のカリキュラムに関する3年間の研究を、川越市の幼保小連携の新たな柱の一つとしてまいります。